# 東方弱虫録5

～幻想戦闘記

筆者　カムケン
イラスト　フラットライン

# 東方弱虫録５～幻想戦闘記

カムケン

しっぽ漬

## プロローグ　霊夢ルート分岐？

広場のベンチに座るナズーリンに、勇気は膝枕ではなく……巨大なピザに埋め込まれた勇気の姿があった。ピザに埋め込まれ、ナズリーリンの膝を枕にして寝る。膝枕いや、その姿はピザ枕であった。

チーズの独特な匂い、頭と背中がくっ付き、動くとネチョネチョと不協和音が広場に響く。チーズが糸を引くネバネバ感が心地よく感じる。

これが自分……斎藤勇気が求めたオアシスなのかもしれない。

「このネバネバが癒されるんだ」

「……君はピザ枕好きなんだね……嬉しいよ」

「ボクはナズーリンなら食べられても良いと思うよ」

「……おや、誰かが見ているようだ」

ナズーリンの視線の先には、木陰に隠れる見覚えのある大きな赤いリボンをした少女の姿があった。だが、その姿は冗談のように霊夢の身体は巨大なハンバーガーでサンドされ、着ぐるみのように頭と足が出ている

状態であった。
「れ、霊夢!?　どうしてそんな姿に!?」
霊夢が逃げるように踵を返すと、その股下からはどろりとした肉汁とソースが溢れ落ちる。
「勇気の馬鹿!?」
ピザに埋め込まれたチーズで粘つく身体を何とか引き剥がし、霊夢に駆け寄る。
「霊夢……ボクは……」
「何よ……別にあんたの為にこんな姿になった訳じゃないんだからね……」
「どっちも選べない」
「へっ？」
その言葉に呆然とする霊夢。
「どっちも好きだあああっ！」
そんな言葉を紡ぎ出す勇気自身も驚いていた。うつむく霊夢が怒りでわなわなと震えるのが伺えたが、もはやその言葉を取り消す事もできずに戸惑う勇気。
「よ～く分かったわ！　あんたが欲しいのはこれね！　ハンバーガーよ！」
「ごめん霊夢!?　そんなつもりじゃ!?」
霊夢が指を鳴らすと、巨大なバンズとどろりとしたソースがかかった厚い肉が頭上に落ち、身体が地面に打ち付けられて、バウンドした拍子に見事にサンドされてしまう。
勇気は何とかそれを力でどかし、立ち上がろうとする。けれど、上の厚い肉のドロドロでヌルヌルの動け

ば動くほど全身がマッサージされているかのようで、快感を感じてしまう。そして下はレタスとまるで低反発クッションであるかのようなふわふわのバンズが身体を沈み込ませる。
「勇気、いくらもがこうが無駄よ」
「やめてよ霊夢……これじゃあ動けないよ！」
「動けなくて良いじゃないの。それに動いても……無駄！　無駄！　無駄！　無駄！　無駄！　無駄！　無駄なんだから！」
バーガー霊夢が地団駄するかのようにパンズを踏みつける。
「うりいいいいいっ!?」
霊夢は股間の場所が分かるのか、ピンポイントで攻めてくる。
その重みで、ドロリとしたソースのかかった柔らかい肉が食い込んで快感が促されていく。
「あんたのその濃厚なタルタルソースをいっぱい出せば良いわ！」
「うりいっ!?」
霊夢のその言葉を皮切りに身体をくねらせながら、濃厚なソースが飛び出していた。
「まだまだよ！」
「やめっ!?」
地団駄を続ける度に快感が絶え間なく続いてゆく。それに絶えられずにドクドクと白いソースが出し続けられる。巨大なハンバーガーからは白いソース溢れ落ちる。
「もうソースは出ないようね」

ソースは出し尽くされ、タコのようにふにゃふにゃと脱力する。
「はう〜」
「最後に私が食べてあげるわ」
霊夢は笑顔でそう言うと、猛烈な速さで巨大なハンバーガーを食い進む。
「や、やめて!?」
「あんたは人間の私に食べられるんだから幸せでしょ？」
股間の乗った厚い肉にたどり着くと、霊夢は思い切り大口を開けた。
コリッ!?　カリッ!?
まるでウィンナーソーセージを噛み切ったような音と一緒に快感と鈍痛、そして熱いものが溢れ出るのを感じる。
「ご馳走様勇気……」
意識を失う瞬間、霊夢の笑顔が悪魔に見えた。
――ボクは大事なものを霊夢に食べられてしまったかもしれなかった。

# 一章　吸血鬼の玩具

目覚めれば、そこは紅魔館と思しき一室だった。贅沢なふかふかのベッドに寝かされていた。
「さすがに……夢だよね？」
パンツの下を見る。
――ものは付いている……って、当たり前だよね。
安堵の溜息を漏らす勇気だったが、レミリアとの戦いに負けて怪我をした霊夢が気になった。
「そうだ!?　霊夢が……」
その時、ノックの音が部屋に響く。
「部屋に入らさせていただきますね」
吸血鬼のメイド、夜咲夜が部屋に入って来る。そしてその傍にはレミリアの姿があった。
「霊夢は何処にいるの!?」
レミリアに詰め寄ると、目にも止まらぬ速さで咲夜のナイフが喉に当てられる。

「それ以上、お嬢様に近づきますと、只ではすませないわ！」
「良いわ咲夜。勇気、そんなに霊夢を解放して欲しいの？」
レミリアの言葉にナイフを仕舞う咲夜。やはりメイドだけに主の言葉には忠実らしい。
「ボクにできる事なら何でもしますだから霊夢だけは……」
「ふ～ん。今、何でもするって言ったよね？」
「はい」
子供のような悪戯な笑みを向けるレミリア。
「じゃあ、妹のフランの面倒を見て貰おうかな。フランの面倒を途中で投げ出したり、逃げ出したら死刑だから……分かった？」
「は、はい!?」
「じゃあ咲夜、フランの部屋に連れて行ってあげてね」
「かしこまりました」
と、咲夜が会釈すると、勇気のその手を引かれる。
「今からですか？」
「恐がられる前に連れて行った方が良いと思いまして」
ニコリと笑う咲夜に何か不安を感じずにはいられない。
「えっ？」
レミリアの妹であるならば、吸血鬼であるという事だ。その性格が全く分からないだけに不安だけが残る。

「ここが妹様の部屋ですわ」
犯罪者のように手を引かれ、連れて来られたのは地下の扉だった。
頑丈そうな紅い鉄の扉には無数の御札が貼られていた。まるで封印を解いてはいけない化物でもいるかのように……
「面倒を見ると聞いていたのですが……ボクは食べられてしまうのでしょうか!?」
その言葉に咲夜は何かを考えるように……
「心配いりませんわ。最近の妹様は加減を覚えましたから。美味しい活け造りにしてくれます」
「良かった。そうなんだって……ええっ!?　活け造りってなに!?」
「それではごゆりると……」
いつの間にか扉が開かれ、咲夜に背中を押されていた。
部屋に入った瞬間、強烈な甘い匂いと……血生臭が鼻を刺激する。
――嫌な予感がする。
振り向くと、カチャリと扉の鍵が閉まる音が聞こえた。外からカギをかけるタイプの扉らしく、押して引いてもビクともしない。
「あなたが新しい玩具？」

〇い少女の声が聞こえてビクリと思わず身体を震わす。
声のした方を向くと、紅い床に紅い壁、いや、違う。さらにそれを壁と床を紅い血で埋め尽していた。そこに少女が一人。その周囲には変な風に手足が折れ曲がり、血と溶けた飴で固められた罪と書かれた袋を被った筋肉質の裸男達が、オブジェのように転がっているのだ。
この少女が全てやったのだろうか？　だとしたらむごすぎる。
レミリアと同じようなナイトキャップのような帽子。金髪をサイドテールに纏め、真紅を基調とした半袖ブラウス、ミニスカート。背中には一対の枝に七色の結晶がぶら下がったような得体の知れない翼が生えている。
似たような帽子と翼は……少し違うが、その容姿や特徴からは直感的にレミリアの妹、フランという少女なのだろうと思った。
「君がレミリアの妹さんかな？」
勇気がそう尋ねると、妹のフランと思しき少女は八重歯を見せ、不気味な笑みを浮かべた
「そう。私はお姉さまの妹、フランドール・スカーレットよ。斎藤勇気さん」
名前を知っているという事はレミリアか咲夜が事前に伝えていたらしい。
ううっと呻く周囲の人達。
――この状況は普通じゃない
フランがゆっくりと歩む寄り、思わず勇気は後退りしてしまう。
それを不服に思ったのか、フランが勇気を睨むように見る。

「……な、何して遊ぼうか？」
フランに笑って言うも、身体の震えが止まらない。逃げようとするならば、男達のように手足を折られ、飴がけにされ、血のソースで彩られてしまうのだ。
――逃げちゃ駄目だ……
「弾幕ごっこ」
「それ以外はないかな……ボク、弾幕ごっこは得意じゃないんだ」
「あら、あなたはここの男達より度胸が無いのね。霊夢の家に居候するぐらいだから少しは骨がある人間だと思ったのにね。骨が無いなら折っても大丈夫だよね？」
フランが握り拳を作り、捻る動作をする。その瞬間。
パリンッ!?
隣の棚に飾ってあった花瓶が突然に割れる。
「ひっ……!?　そ、それ以外なら！」
「それ以外？　フランの美味しいお菓子になってくれるの？」
「もっと安全な遊びはないのかな？　おままごととか」
「弱虫……おままごとならあなたは役に立たない犬の役ね」
手招きするフランに恐る恐る近づく。
「犬って、人間じゃないよね……できれば人間の役が良いかな」
「できないなら食材の役ね」

「そんな……」
「お手！」
フランが手を出す。勇気はしかたなくそれに合わせて手を乗せる。
「わん……」
「ちんちん！」
「わん！」
ちんちんの姿勢をする勇気。
「お座り！」
「わん！」
勇気がお座りの姿勢をすると、フランはなぜかニーソックスを脱ぎ始める。
「犬なら舐めてくれるのよね？」
座る勇気に裸足を突き出すフラン。
「そんなことできる訳ないよ!?」
心なしか、周囲の男達の呻き声が強くなったような……
「ここの男達は喜んでやってくれたのにね。勇気は嫌なのかしら？　嫌なら食材役ね」
「分かったよ」
フランの言われた通りにその裸足を舐め上げる。
――自分はいったい何をやっているのだろうか？　プライドも何もない。

「ほら、もっと綺麗に舐めとるのよ」
「こう」
ペロペロとフランの裸足を犬のように舐める。
――あんな風に骨を折られるぐらいなら、プライドを捨ててしまった方がマシだと思ってしまったのだ。
「下手！　あなたは犬の役、失格ね！」
「そんな!?　どうやって上手く舐めれば良いの!?」
「お座り！」
立ち上がろうとすると、フランに座らされる。
「食材は嫌だよ……」
「咲夜」
フランが呼ぶと、瞬時に咲夜が現れる。
「妹様。いかがいたしましたか？」
「咲夜、あれを持って来て欲しいのよ」
咲夜がまじまじと勇気を見つめる。
「大丈夫よ。怪我をしない程度にね」
「……かしこまりました」
咲夜が消えたと思えば瞬時に現れる。その両手にはバケツが握られており、どろりとした透明な液体が入っていた。

――嫌な予感がする。
「勇気、そこに座ってね」
咲夜が絨毯に紙のような物を敷き、そこに座るようにフランが指示する。
「な、何をするの？」
「では、ごゆりると……」
咲夜が瞬時に消える。
「勇気の新しい役よ」
フランが握り拳を作り、捻る動作をすると、服がビリビリに引き裂かれて真っ裸にされてしまう。
「ちょっとなに!?　何で裸に!?」
「美味しそうね」
舌なめずりするフランによってバケツに入ったどろりとした液体を頭からかけられる。
「えっ？」
思ったよりも少し熱い液体……それに甘い匂い、ベトベトするこの液体は……まさか飴？
「勇気は食材。まん丸の飴玉の役ね」
――まん丸とはどういう事だろうか？　人間は飴で固まっても球体にはならない。
転がった周囲の男達は飴がかけられ、手足を不自然に折れ曲がっている。それは玉のように見えなくもない。
「嫌だよ！　飴玉なんかになりたくないよ!?」

勇気は立ち上がろうとするも、身体についた固まりかけた飴がベトついて体育座りのような固定してしまっていた。
「大丈夫よ。あの男達のように骨を折ったりしないから」
フランは手袋をすると、勇気の両足を持ち上げてでんぐり返しの途中のような状態にし、肩を足にくっ付けてしまう。
「ひっ!?」
フランが手を離すと、飴の粘着により足の方が完全にくっ付いてしまう。
そしてバケツのどろりとした熱い飴をまんべんなく勇気にかけていく。
「これから勇気を本格的に飴玉にしちゃうね」
「飴玉って……人間は玉にはならないよ!?」
「フランにかかれば人間も飴玉に変わってしまうのよ」
フランは捏ねるような動作をし、勇気の身体の飴を塗り広げていく。それはまるで全身マッサージのようで、快感を伴っていく。
「ふにゅううう……」
「やっぱりキャンデーは甘いミルク入りが良いよね」
そう言ってフランは重点的に股間をしごくような動作をし、ミルク絞りを行う。それに耐えられるはずもなく……
ピュッ!?　ピュッ!?　ピュッ!?

何かが飴の中で液体が飛び出る音が聞こえた。
「あーあ出ちゃった……」
泣きそうな程の屈辱感。
「見て見て勇気。飴の中にミルクが入ったよ」
フランの言う通りに飴の中に白いミルクが浮いていた。
「やめてよ……こんなの……」
「少し少ないよね。もっといっぱい出しちゃうね」
「もう無理……出ないよ!?」
勇気のそんな言葉に手を止めるはずもなく、フランはさらに手を速め、ミルク絞りを行う。それに捏ねるような動作を加える。
——我慢すれば……いや、もう耐えられない!?
ピュッ!? ピュッ!? ピュッ!?
また飴の中にミルクが入れられてしまった。
「駄目だよこんなの……」
「ほら、もっといっぱい出さないとね」
今度はニーソックスのままのフランの足が股間に乗せられ、捏ねるような動作がされる。
「やめっ!? うにゅっ!?」
ピュッ!? ピュッ!? ピュッ!?

また、飴の中にミルクがぶちまけられていく。
「飴が固まってきたね。そろそろ飴玉にしちゃうね」
フランの手によって飴が練られ、玉の形が整えられていく。その際にもベトベト感が伝わって、ミルクが飛び出す。
ピュッ!?　ピュッ!?　ピュッ!?
「ふぁ〜」
「また出してくれたんだね」
フランが手を止めると、綺麗な飴玉の形へと整えられていた。
「本当に飴玉になるなんて……」
「このまま美味しく食べちゃうね」
ペロペロキャンデーのように舐めていくフラン。そのフランの舌が股間の箇所に触れると……
ピュッ!?　ピュッ!?　ピュッ!?
固まった飴玉の中にミルクが広がっていく。
「ひぐううっ!?」
「あら、ちょっと敏感になってきてるね。今度は……」
フランが肩を舐め始めたかと思うと、牙を突き立てた。
「痛いいいっ!?」
血がどくどくと流れ、飴が赤く染まっていく。

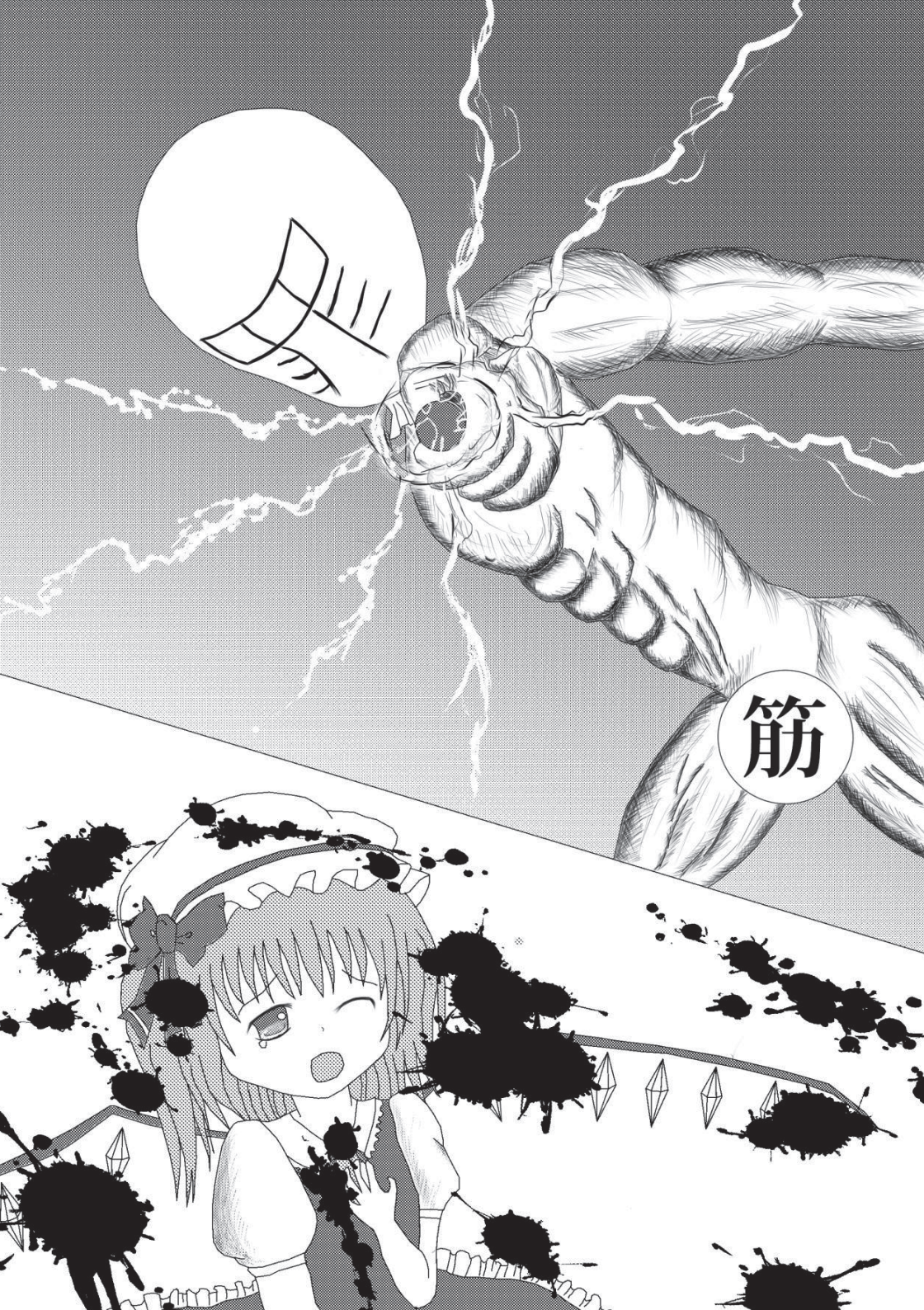
「痛かったの？　ご褒美をあげるから我慢して」
フランが軽くキスをしたかと思うと、舌を絡めてくる。
飴の甘い味がするキス。
何度もキスで舌も絡められたせいか、この子になら食べられて良いのではと思ってきた。
その後、何度も肩の血を吸うフラン。レミリアと違って加減を知らない……このままでは吸い尽くされてしまうのではないのだろうか？
「それ以上吸ったら……ボクの血が無くなっちゃうよ」
「そうなの？　じゃあねぇ、下のを貰うね」
「……えっ？」
カリッ!?
ピュッ!?
フランが股間を噛み付いた瞬間、ミルクが漏れ、割れた飴から吹き出す。
それはフランの顔にかかり、白く染める。
「勇気のは血も精気も美味しいのね。もっと食べたいぐらいよ」
「ちょっと……それ以上は……」
股間を舐め回すフラン。
「ひぐっ!?」
「こんなのがお姉さまの食材だなんて勿体無いよね。私の食材にならない？」

「ボクは誰の食材でもないよ」
「あら、そんなこと言って良いの？　このまま噛み切っちゃおうかしら」
「止めて！　ボクは……霊夢が……」
「待つんだ！」
その時、低い若い男の声が聞こえた。
――良かった……妹紅達が助けに……
その声に助けが来たのだと勇気は思った。だが、その声の主と思われる人物は完全に変態だった。
罪という袋を被り、筋肉質のボディには飴が塗られてテカテカと嫌な光沢を放っている。
「帰ってよ。あなたには用はないのよね……ツミ」
「食べるなら私を食べるんだフラン！　美味しそうだろ？」
テカテカと光る筋肉をまるでボディビルダーのように力こぶを見せるツミという男。それはやはり只の変態だった。
「固くて不味そう」
「キャンデーのようにペロペロと舐めても良いし、リンゴ飴のようにカリカリと齧っても良いぞ」
「いらないから帰ってよね。私は勇気が良いのよ」
ツミという変態男は身体をくねらせ、膝をつく。
「なぜだあああっ!?　あんなに下僕として俺を可愛がっていたのになぜだ!?　あの昔のフランはどこへいったあああっ!?」

フランは勇気の身体を敷かれていた紙で顔以外を包み、リボンのように縛っていた。
「こうすれば勇気キャンデーがいつでも食べれるわ」
「解放してよこんなの嫌だよ!?」
「駄目よ。あなたは死ぬまで食材役なんだからね」
――どうやらボクの運命はここで終わりのようだ。飴にされた身体はフランという吸血鬼に死ぬまで舐め続けられるのだ。
「そんなの嫌だよ……飴なんかになりたくないよ……」
ポロポロと涙が溢れ落ちる。霊夢達はみんな捕まり、誰も助けに来ないのだ。
フランが流す涙を美味しそうに舐めとる」
「泣いているの？　ウフフフ……絶望させればもっと美味しくなりそうね」
「泣くな！　諦めるな！　希望は最後まで捨てちゃいけない！　君が諦めたら誰がみんなを助けるんだ！」
「そうだよ……ここで諦めたらみんなが食材にされちゃうんだ」
ツミという男の言葉の通りだ。ここで諦めたら何もかも終わってしまう。
「あなたなに？　せっかく勇気が美味しくなりかけたのに邪魔しないでよね！」
「お前は人を傷つけすぎる！　人間は心も身体も弱いのだ！　お前はそれをいい加減に理解するべきだ！」
「加減してるわよ。心も身体もいたわってね」
ツミは血塗れなって手足が折れ曲がった周囲の男達を見る。
「これでこの惨状か？　呆れるな……紫様から食材の扱い方は聞いていない訳ではあるまい」

「死なない程度にね。それにすぐ治るんじゃないの？」
ウィインッという機械音のような音と共に、罪の袋を被った男達の折れ曲がった手足が奇妙な光を放つ。
「罪袋・ストレングス・スーツはお前に玩具にされる為に作ったのではない。あくまでも自衛の為だ。いくら吸血鬼でも、痛いものは痛いというのは理解できるだろ？」
「そうね。痛みを与えてくれる人がいないから分からないのよね。あなたも良い声で鳴いてくれるのかしら？」
なにやら手足で変なポーズをとり始めるツミ。
「いいぜ！　てめえが何でも思い通りに出来るってなら……まずはその幻想をぶち殺す！」
フランが何かを頭上に投げる。その絵柄を見て勇気はスペルカードだと分かった。
「ツミさん!?　スペルが……!?」
その刹那、被った袋の罪という文字が青白く光る。
「禁弾　スターボウブレイク」
七色の無数の光弾がツミに迫る。
ツミが駆けると同時にスペルカードを投げる。
「レベル零・撃札　スペルブレイカー！」
ツミの右手が弾幕に触れた刹那、一瞬にして周囲の光弾が消し去る。
「これがスペルカード？　霊撃札を使ってるだけじゃないの？」
フランの言葉にツミの手には霊撃札が握られている事に気付く。
「やっぱり霊撃札なんだ」

そのままフランの懐に飛び込むツミ。
「男女平等　罪パンチ！」
もう一方の霊撃札を握った左手でフランの顔面を殴る。
パンチと霊撃札の衝撃で、フランの身体が吹き飛んで壁に激突する。
「ひでぶ!?　殴ったね……お姉様にも殴られた事なかったのに！」
立ち上がり、鬼のような形相で睨むフランを恐れもせずに歩む寄るツミ。
「それが痛みだフラン」
「ボクとはまるで違う……霊撃札をあんな風に使うなんて……」
そのツミという男は勇気とは全く違う戦闘スタイルを持っていた。霊夢や自分とも違う荒々しい戦い方。
「いくら賭けるフラン？　フランだけに1フランでも良い。賭けても良い……俺には絶対に勝てない！」
「コインいっこ」
「ほう」
「あなたがコンテニューできな……!?」
ツミの前にコインが舞った刹那。
フランの目の前にスペルカードが舞う。
「レベル5　とある罪の超電磁砲！」
フランが投げたコインがツミによって弾かれ、稲妻を帯びて高速でフランに向かう。
「きゃああっ!?」


筋

フランは避けられずに稲妻を帯びたコインに当たり、感電したまま膝をつく
「俺に負けた事を忘れた訳ではなあるまい？　お前には絶対に負けないという自惚れがあるようだ」
「私はまだ負けてない！」
立ち上がろうとするフランであったが、電気を帯びるその身体は床から離れない。
「今のうちに行くんだ斎藤勇気！　霊夢達を助けるんだ！」
「どうしてボクの名前を!?　それにツミさん、あなたはいったい……」
「俺の事は津・美と呼んでくれ。こち亀の両津の津に美人の美だ。それと勇気とはこれでトモダチ」
なぜか親指を立てる津美。
「は、はい」
「不安だろうが安心しろ。これは紫様の指示だ。勇気に霊夢達を助け出させろという指示だ。カギは開錠してある。できるな？」
「紫さんが……分かりました。ありがとうございます」
津美にペコリとお辞儀をすると、勇気は駆けて紅い扉に手をかける。
「勇気……すぐに戻ってくるよね？」
振り向くと、フランの悲しげな表情。
「あんな事されて……戻ってこれる訳ないよ！」
「今度は優しくするからねぇ……お願い……」
フランの潤んだ瞳が離れていても分かった。

――本当にボクを求めている？　どうして？　いや、そんな訳ない！
「……勇気」
純真無垢の表情に足が一歩踏み出す。
「騙されるな！　行け！」
「は、はい！」
津美に促されて踵を返して扉から出る勇気。
勇気が扉を閉めた刹那。
「勇気ううううっ!?」
フランの声と共に何かが扉に当たった音が聞こえた。
「えっ!?」
「……開けてよ勇気君……」
フランの手と思しきものが扉をこじ開けようと、青い炎を帯びて飛び出る。
「ひっ!?」
どうやら紅い扉に貼られた無数の札の結界の効力に拒まれているようであった。
フランの顔が覗き込んだ刹那。
「何をしている！　早く扉のカギを！」
「はい！」
「勇気君が開けないと……手足だけじゃすまないからねえええっ！」

勇気は扉を閉め、すぐにカギを施錠する。
「早く……霊夢を助けないと……」
フランの叫び声を聞きながら、勇気は地下室を後にする。